

2017年7月16日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記2章26～35節

説教：苦しみをともにする

あらすじ

ダビデはその生涯の中で二度にわたり、息子からいのちを狙われました。最初に父に逆らったのは次男のアブシャロムです。エルサレムから父親を追い出し、イスラエルの王になろうとします。その企みは、アブシャロムが戦場で不慮の事故で亡くなったことにより頓挫しました。二回目は、ダビデが高齢になり体が不自由になったときです。今度は四男のアドニヤが父親に相談もせず、イスラエルの王になろうとします。預言者ナタンがこの動きをいち早く察知しダビデに知らせた結果、ダビデはバテ・シェバの息子であるソロモンに王位を譲ると宣言をいたします。こうしてアドニヤの企ては阻止され、彼は逮捕されます。普通であれば殺されるべき所でしたが、執行猶予処分ということで釈放になります。そのままおとなしくしていれば問題はなかったでしょう。ところが、ある日、アドニヤはソロモンの母バテ・シェバの元を訪れ、こんなことを言います。「今、弟のソロモンが王になっているけれど、本当は兄である自分が王になる権利がある。」こうして彼は執行猶予の身でありながらソロモンに挑戦状をたたきつけます。その結果、ソロモンはアドニヤをとらえて処刑します。

それに続いて今日の箇所ではヨアブという人が処刑されていきます。こんな話が続くと、なんだか聖書の世界は非常に恐ろしいという印象を持ってしまうかも知れません。私たちといったいどのような関係があるのか、どこに恵みがあるのか、わからなくなります。

でもきつとあるはずですよ。そのことを見て参ります。

1 祭司エブヤタルと將軍ヨアブ

ヨアブは、エブヤタルが祭司の職を罷免されたと聞き、今度は自分がさばかれる番であり、將軍職を罷免されることでは済まない。処刑されることを予感し、天幕に逃げ込んでいます。なぜ恐れたのでしょうか。実は、このふたりには共通点があります。アドニヤがダビデに代わってイスラエルの王になろうとき、祭司エブヤタルと將軍ヨアブはダビデを捨てて、アドニヤを支持する側につきました。ふたりはダビデの側近中の側近です。その側近たちが、ダビデを裏切り、殺そうとしたのですから、死罪は免れません。確かにヨアブは殺されます。しかしエブヤタルは赦されます。同じ罪を犯したのに、なぜこのような違いが生まれるのか。そこから見ていきます。

2 祭司エブヤタル

1) 神である主の箱をかつぐ

ソロモンは、エブヤタルを呼び出してこう言います。「あなたは死に値する者であるが、きょうは、あなたを殺さない。あなたは私の父ダビデの前で神である主の箱をかつぎ、父といつも苦しみをともにしたからだ。」

神である主の箱というのは、ダビデの時代からさかのぼることおよそ五百年前、紀元前千五百年頃にモーセが神の指示に従って造ったものです。イスラエルがモーセに率いられて荒野を旅していたとき、神の箱は祭司

たちにかつがれて移動します。やがてモーセが死んでヨシュアがリーダーとなったとき、祭司たちは主の箱をかついでヨルダン川をわたり、約束の地に足を踏み入れました。

2) ダビデと苦しみを共にする

そしてダビデが王となり、息子のアブシャロムから命をねらわれエルサレムから脱出するときのことです。エブヤタルは祭司として主の箱をかつぎ、ダビデと行動をともにしようとしていました。しかしダビデは、こう言うのです。「あなたはエルサレムにとどまり、密かにアブシャロムの作戦情報を入手しなさい。」エルサレムにとどまれば、アブシャロムに殺される可能性があります。それでもエブヤタルはエルサレムに戻り、危険をおかしながら、アブシャロムの軍事作戦情報をつかむことに成功し、その結果、ダビデは無事に逃げ延びることができました。

「あなたは私の父ダビデの前で神である主の箱をかつぎ、父といつも苦しみを共にしたから。」今回の事件でエブヤタルがしたことは、死罪に相当する。けれども、むかしダビデがアブシャロムから命をねらわれたとき、エブヤタルもいっしょにいてくれた。そのことに免じて、罪を赦すとソロモンは告げます。父といつも苦しみをともにすることとは、もう少し具体的に言えばどのようなことか、そのことはまた最後のところで触れていきます。

3 将軍ヨアブ

1) 祭壇の角をつかむ (出エジプト記21章12～14節)

エブヤタルのことを聞いたヨアブは、すぐに主の箱が置かれている天幕の中に走り、祭

壇の角をつかみました。初めての方には、祭壇の角をつかむとはどんなことなのか、不思議に聞こえるでしょう。実はこのようなことをしたのはヨアブが初めてではありません。アドニヤのクーデターが心配に終わり、逮捕されることが確実になったとき、彼は主の天幕の中に逃げ込み、祭壇の角をつかみました。出エジプト記21章12～14節にこう書かれています。「人を打って死なせた者は、必ず殺されなければならない。ただし、彼に殺意がなく、神の御手によってことが起こされた場合、わたしはあなたに彼ののがれる場所を指定しよう。しかし、人が、ほしいままに隣人を襲い、策略をめぐらして殺した場合、この者を、私の祭壇のところからでも連れ出して殺さなければならない。」

祭壇の角をつかめば、いきなり殺されることはない。きちんとそれぞれの言い分を確認する裁判を行いなさい。それがこの律法の趣旨でした。アドニヤの場合もきちんと裁判が開かれ、ソロモンから執行猶予という判決が言い渡されました。

では同じように祭壇の角をつかんだヨアブはどうなったか。彼の場合も裁判が行われています。ソロモンは、「行って、彼を打ち取れ」と言ってベナヤを派遣したのですが、いきなりヨアブを打ちません。ヨアブが祭壇の角をつかみながら「ここで死ぬ」と言っていると、ソロモンに報告しに戻っています。きちんとヨアブの言い分を聞いています。そうしてから判決が下されます。31節。「では、彼が言ったとおりにして、彼を打ち取って葬りなさい。こうして、ヨアブが理由もなく流した血を、私と、私の父の家から取り除きなさい。」

2) ふたりの義人を殺した罪

ヨアブが理由もなく流した血とは、イスラエルの将軍アブネルとユダの将軍アマサのふたりを虐殺したことを指します。アブネルはダビデの敵の側の将軍ではありましたが、いつまでも同じイスラエル民族同士が戦っているはずはない、早く停戦協定を結ばなければならないと考えていました。ダビデも彼となら話ができると期待していた。しかしヨアブは自分の弟が殺されたことでアブネルを憎み、ダビデに無断で虐殺してしまいました。

アマサもかつてはダビデの敵の将軍でしたが、戦争が終わるとダビデの軍隊の将軍として迎えられた人です。きのうまで敵として戦っていた相手であっても、主にあつて和解できることをダビデは示そうとした。ところが、ヨアブは将軍職を奪われたことをねたみ、アマサを虐殺してしまいます。このようにヨアブは、エブヤタルと違い、ダビデと苦しみを共にしようとはしません。むしろダビデを苦しめるようなことを繰り返しました。その結果、ヨアブは死ななければならないとソロモンは判決を下しました。

4 神

1) もし罪がさばかれないままであるなら

神は厳しい方なのでしょうか。こう考えたらどうなるのでしょうか。もしソロモンが、「もう昔のことは水に流して、今日から仲良くやりましょう」と優しい言葉で語ったとしましょう。平和で穏やかな世界に見えるかも知れません。では、殺されたアブネルとアマサのことはどうなるのでしょうか。運が悪かったということでしょうか。もしこれが自分の家族だったらどうか。とても運が悪かったでは

済まされない。悪いことをしても誰もさばかれない。そんな世界で良いと思いますか。だれも思わないでしょう。罪は罪としてさばかなければならない。それが公平であり、正しいことだと誰もが思うはずです。私たちが思う以前から、神とはそのような方なのです。ですから、神は厳しいのではない。もし正しい者が殺されたなら、その罪は必ずさばく。そのようにして公平さを取り戻そうとされます。

2) 私たちは罪人である

そのような神であるとわかるとひとまず安心できます。しかし、こんどは別の所から不安が襲って来ます。神はこれほどに罪を憎み、正しいことを私たちに要求するということになると、では、私はどうなのか。自分は安心していられるのか。ヨアブのようにさばかえるかもしれない。そんな不安が襲ってきます。その不安は間違っていない。というのは、私たちはなにをしたのかです。ヨアブのように人を殺したわけではないかも知れませんが、しかし、心の中で何を考えたか。自分を守るために嘘をつき、人が持っているのをねたみ、自分だけ良ければよいと考えて隣人を蹴落としていく。ひどいことを考えていながら、表向きは良い人の振りをしている。それが私たちではないのか。だれが神の前には立てるのでしょうか。誰も立つことができません。私たちはヨアブのようにさばかれて終わりです。

3) 赦しの道を備える

もしそれだけなら、私たちには望みがありません。しかし神はさばきからののがれる救いの道を備えます。今日の箇所では誰が救われま

したか。さばかれるべきであったエブヤタルが救われました。理由はこうです。「あなたは父といつも苦しみをともにしていたからだ。」

このことばはどのような意味でしょうか。ダビデの末として来られたイエス・キリストはどのような苦しみを受けられましたか。この方はさげすまれました。憎まれました。激しい怒りをぶつけられました。ののしられました。笑われました。けれども、神である方は何も言いません。反論もせず、ただ黙ってゴルゴダの丘に引かれていきます。そして十字架でほふられました。

ソロモンが言った「あなたは父といつも苦しみをともにしていたからだ。」とこれをイエスのことと結びつけて考えるなら、どうなるでしょう。誰が、神である方を十字架に追いやったのか。大昔の私以外のほかの人たちですか。もしそう思うなら、父と苦しみをともにすることにはなりません。でももし、あの十字架は私のことであると思うならどうなるでしょう。私があの方に石を投げ、あの方につばを吐きかけ、あの方に激しいののしりのことばを叫んだ。そうやって、私は主を十字架に追いやった。私が主を苦しみに追いやったのです。私が言わなくても、皆さんもうすうすう感じていたかも知れません。しかし普通の人はそれ以上考えません。なぜか。苦しいからです。なにも解決がないと思うからです。

しかし、解決があると聖書は言います。主を苦しみに追いやったのは私であると思えたなら、主はどうしてくださるのか。その逆のことが起ります。主が私たちと苦しみをともにしてくださる。あなたをずっと苦しめてきた罪を主が背負われる。主が喜んで、苦

しみをともにしてくださる。そのようにしてあなたは救われる。これが今日私たちに語ってくださる主のみことばです。

正しく生きなければと、頭でわかります。良い人間になるべきだということもわかります。努力はします。けれども、すぐに罪が頭をもたげてきて、人を傷つけ、嘘をつき、神につばを吐きかけます。それが私たちの本当の姿です。そんな自分を見て悲しみます。

でもそんな私たちに主が寄り添ってくると言います。ただ寄り添うのではなく、いつしよに苦しみます。そのような主といっしょに歩んでまいります。